

平成28年度 山形県環境教育推進協議会 議事録

1 日 時

平成29年 2月 9日 (木) 午前10時00分～正午

2 場 所

山形県庁1201会議室

3 出席者等 (敬称略)

(1) 出席委員

池田 友子 井上 久明 山本 精一 田中 裕子 有川富二子 白壁 洋子
二藤部真澄 今村 哲史

(2) 欠席委員

荒木 雅彦 板垣 巖 岩沢 ちか

(3) 出席した事務局及び関係所課の職員

環境エネルギー部長 大森 康宏
環境エネルギー部次長 永澤 浩一
環境科学研究センター所長 奥山 卓郎
環境エネルギー部環境企画課長 小松 浩
循環型社会推進課長 佐藤 孝喜
みどり自然課みどり県民活動推進主幹 土方 孝宮

ほか 環境エネルギー部 環境企画課、循環型社会推進課及び環境科学研究センターの職員
教育庁 文化財・生涯学習課及び高校教育課の職員

4 会議の概要

(1) 開 会

(2) 挨拶 (大森環境エネルギー部長)

(3) 協議事項

山形県環境教育行動計画に基づく施策の実施状況について

今村会長	はじめに、協議事項として、「山形県環境教育行動計画に基づく施策の実施状況について」、事務局から御説明をいただき、その後、委員の皆様から御意見等をいただきたいと思います。
事務局	資料1～資料3-2について説明
今村会長	ただいまの事務局の説明に対しまして、確認しておきたい点など御質問がございましたら、先にこれをお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

白壁委員 (公募)	<p>御説明いただきありがとうございました。こんなにたくさんの活動があり、子ども達にもいろいろな体験の場があり、すごいと思っています。</p> <p>質問が3つあります。1つ目は実施状況の22番の子ども農山漁村交流プロジェクトについてです。確か平成20年ぐらいから県で進めているプロジェクトの一つで、誘致活動の支援をしているようですが、プロジェクトの参加状況、実際の活動状況について教えていただきたいと思います。</p> <p>2つ目は31番の放課後子ども教室についてですが、県内全域でどのくらいの教室があり、どのような支援をしているのか教えていただきたいと思います。</p> <p>3つ目は43番で、教材として学校に配布している「森のたんけん手帳」についての学校での利用状況を教えていただきたいと思います。</p>
環境企画課	<p>22番の農山漁村交流プロジェクトについては、平成28年3月時点で、県内で組織されている受入地域委員会は11団体です。そのうち7つが農林水産省から受入体制モデル地区に指定されています。11団体のうち農林許可民宿という形で受入可能なのは5団体で、具体的には、西川町、飯豊町、戸沢村、鶴岡市、遊佐町です。他地域では数件の農家民宿で受け入れているような実態です。</p>
文化財・生涯学習課 生涯学習振興室	<p>放課後子ども教室は、県内の32市町村で実施されており、教室数は111です。活動内容は、伝統芸能の体験活動、学習活動、交流活動、スポーツ活動など様々で、環境教育も一部入れている状況です。どれくらいの放課後子ども教室で環境教育をしているか正確な実態は把握できていませんが、来年度、環境企画課と連携して調査したいと考えています。</p>
みどり自然課	<p>43番の「森のたんけん手帳」ですが、昨年度までは総合支庁、市町村、緑の少年団等を中心に配布をしておりましたが、今年度、要望のあった学校にも増刷して配布しました。小学校では、少年自然の家での体験学習の事前学習や当日の活用資料などとして使われていると聞いております。</p>
有川委員 (公募)	<p>13番ですが、大学生の柔軟な発想によるワークショップを開催したと書いてありますが、どのようなワークショップだったのでしょうか。</p> <p>2つ目は、37番の最上地域における環境教育の取り組みですが、遊学の森で開催された森の案内人養成講座の実績について教えていただきたいと思います。</p> <p>最後3つ目は、59番の環境学習支援団体についての認定基準や、どんな団体がどんな活動をしているのか教えていただきたいと思います。</p>
循環型社会推進課	<p>13番の循環型推進のワークショップについては、11月19日、20日に開催したやまがた環境展の中の取り組みとして、今年度は東北文教大学の提案により、子供を対象にした3R教育のためペットボトルを活用した造型品や作品を作るなどの取り組みをしました。</p>
みどり自然課	<p>37番の最上地域の環境教育ですが、春の部については19名、秋の部については20名の参加となっています。冬の部については、2回開催となっており、1回目は2月に32名参加、もう1回は25日開催予定です。特に冬の活動の取り組みについては、</p>

	非常に人気があります。
環境企画課	<p>環境学習支援団体ですが、環境の保全に関する情報の提供や体験の機会の場の提供等を通じて県民の環境学習を支援している団体となります。活動に意欲のあるところを認定しており、現在、35団体を認定しています。</p> <p>企業やNPO等の団体を認定しており、例えば、電力事業等の企業では、太陽光のパネルの発電の様子の見学会、自動車販売会社では、自動車を売る際のエコドライブ教室の実施などをしていただいております。</p> <p>NPOでは、地球温暖化防止の活動や、自然観察会、野生生物の保護活動などの自然体験や勉強会を行っていただいております。</p>
山本委員 (私学)	<p>2つ質問があります。1つ目は、10番の県営太陽光発電所を活用した再生可能エネルギーの学習ですが、どのような形で実施されているのでしょうか。また、実際の施設を見学した人はどのような感想を持たれたのでしょうか。</p> <p>2点目は21番のグリーンツーリズムについてです。グリーンツーリズムを推進するのはとても大事なことだと思います。具体的にグリーンツーリズムを山形の中でどのように実施するのか、また、教育旅行という言葉が出てきますが、いったいどういうものか教えていただきたいと思います。</p>
環境企画課	10番の見学会については、昨年の8月27日に開催しています。
環境科学研究センター	見学会については、企業局が開催したツアーで親子合わせて23名が参加しました。環境科学研究センターは、午前中の1時間で再生可能エネルギーの講習をしました。アンケートでは、子ども達から、いろんな現場を見ることができて嬉しかったという声をいただいています。
環境企画課	21番の教育旅行については、修学旅行と違い、学校の生徒やグループが自然等に親しみながら学ぶようなものだったと思います。
山本委員 (私学)	県営太陽光発電所を見学する際に、最初の1時間ほどの太陽光発電についての講習をしたということではないのですか。
環境科学研究センター	前段は、環境科学研究センターの隣地にある県営太陽光発電所の見学会を行ったもので、後段は、企業局が米沢の水道事務所で開催したもので、別々に実施したものになります。
山本委員 (私学)	<p>次代を担う子ども達がエネルギー問題を考えるときに、実物を見て、再生可能エネルギーを学習することが大事だと思います。参加者については、行政が呼びかけて、もっと多くの親子が参加できるようになればいいと思いました。県の環境教育推進の最も大事なコンセプトと直結していると思います。</p> <p>グリーンツーリズムについては、県外の子ども達に関わってほしいというのが1つの目的になりますか。</p>

環境企画課	主に県外からで、さらに海外も視野に入れて取り組んでいると思います。
山本委員 (私学)	それはとてもいいと思います。大きな視野で、具体的に日本全国、海外に発信していく。そうすると、今度は逆に県内にも、そのインパクトで相互作用がおきるのではないのでしょうか。そういう大きな視野で捉えられたら楽しみです。
今村会長	学校現場の現状と課題について、委員の皆様から御発言をいただきたいと思えます。
池田委員 (教育セ)	<p>昨年度は、学校の立場でこの会に出席し、皆様方から学校以外の様々な取組みを聞いて、本当に参考になりました。本年度は、教育センターに異動しましたので、教育センターで行っていることをお話します。</p> <p>1つが番号61番になります。教育センターで環境教育について学ぶことができる研修講座を今年度新たに開設しました。今年教師になって2年目の先生方が受講する教職2年次研修、フォローアップ研修を新たに実施し、その研修講座にESD（持続可能な開発のための教育）の授業づくり講座を実践しました。内容は、ネイチャーゲームを先生方に体験してもらい子ども達の体験型環境教育を知った後、環境ネットやまがたが開発した環境教育プログラム「牛乳パックを活用した紙すき」を先生方に体験していただきました。受講した先生方は一生懸命意欲的に取り組み、先生方の意識を高められたと感じています。講座の最後に環境教育指針の中の一つたい力を理解し、授業での活用方法を伝えました。</p> <p>特に牛乳パックの体験が若い先生方の心に響いたようで、感想を紹介します。「子ども達には牛乳パックはきちんと開いて出しましょうと指導していますが、なぜ出さなければならないか考えずに、決まりごとのようにやっていました。でも実際に牛乳パックから紙を作ることを体験し子ども達が環境保護や地球温暖化を、実感を持って理解できる方法だと感じました。身近なことを通じて考える機会を持つことで、持続可能な社会づくりに関心を持ち進んで参加できる子どもを育てていきたいと強く思いました」と、講座を立ち上げた成果があったものと捉えています。</p> <p>課題としては、2年次教員フォローアップ研修は様々な講座から選択するため、多くの先生に体験していただくのが難しい状況にあることです。</p> <p>3番、4番の出前サポートとカリキュラムサポートプラザについて説明します。出前サポートは、先生方や学校のニーズに応じて県教育センターから専門の指導者を派遣するもので、環境教育を計画したり実践する際に県教育センターから指導者を派遣し研修会を実施します。カリキュラムサポートプラザとは全般的に先生方の教育活動を支援するもので、電話や資料提供のサポートを行います。プログラムを作成する上での電話やメールでの質問や相談への対応や、環境教育関連の図書資料の充実を図っています。ただ、出前サポートの依頼は全体で200～300件くらいありましたが、教科指導や特別な支援が必要なお子さまへの対応、保護者対応が多く、環境教育の申込は多くはありませんでした。</p> <p>そのほか、教育センターのホームページに環境教育指針や概要版のリーフレットを掲載する等の情報提供をしています。</p> <p>山形県では探究型学習に力を入れています。探究型学習とは受身でなく、自分で課題を見つけて仲間と積極的に関わりながら学びを深めていく力をつけるというも</p>

のですが、環境教育指針で求める授業づくりと探究型学習はすごく重なっていると感じます。教育センターに探究型学習の推進講座というのがありますが、その中で今年度、環境教育を題材にした内容を取り上げた講座もあります。探究型学習研修と一緒に環境教育の授業づくりを行い、一緒であることを先生方に気付いていただくのも教育センターの役割であると感じています。

白壁委員
(公募)

今、池田委員から、E S D等で体験を通して学ぶのが大事であるとお話をいただきましたが、今、森林環境教育でも森林E S Dという言葉がでてきており、自然や森での体験が非常に重要であると思っていますが、先生とお話したときに、森での活動は、準備や下見、森を知るといった部分が難しいということを知り、森林インストラクターや森の案内人の方々と一緒にできる機会があればいいと思っていますが、なかなかその機会がありません。

学校から来てくださると言われれば、一緒にやっていけるのかなと思いますが、学校のスケジュールが厳しく、なかなかその機会がありません。

池田委員
(教育セ)

私もこういう会議でいろいろな立場の方の話を知り、学校でこれを取り組めれば、子ども達にも先生方もほんとに良い体験ができるのと感じています。

県教育センターの先生方の研修では、今回は、森に行くことはできませんでしたが、インストラクターや、活動の情報を先生方に紹介していくこともセンターの重要な役割であると思いますので、取り組みたいと思います。

今村会長

学校の先生は、本当に忙しくて大変だと思います。小学校の先生は多少土日の休みは多いですが、中学校以降は土日の休みも取れないようです。部活も、今後、国が指定した資格者が指導するという方向性がでてきます。それだけ忙しい中で環境教育についてそれを一番に持ってくるという教員というのは相当稀だと思います。環境教育の以前に、国も、県も学力を上げることに躍起になっているのが正直なところです。まず国語と算数、数学ができなくてどうするのだという。それが学校では根強いものだと思います。

環境という位置づけ、そこでどういう能力が培われるのかということの価値観が先生達のなかでもう一度確認されないといけないと思います。環境を体験してよかったと感じるのは環境体験活動であって、環境教育としては、どういう人を育てるのかということが大前提にあるということ、教員自体がもう少し考え直す必要があります。今までは「学ぶ」「習得する」、これからは「活用する」と、文部科学省も十年前から言っています。こういう授業をいかに活用するかという能力がこれから問われると思います。情報を活用する能力をぜひ教員に求めたいと思います。このあたりはどっちかと言えば教育委員会の仕事だと思いますが、それが一つの政策としては「探究型」学習となるのかもしれませんが。

しかし、これも「探究」と言わないところに課題があると思います。「アクティブ・ラーニング」(教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称)という言葉も入ってきていますが、あくまでも日本式の「アクティブ・ラーニング」で、世界での「アクティブ・ラーニング」とは違うように疑問を持っています。こういうことに突っ込んでいかないと、いつまでたっても変わらないと思います。

白壁委員 (公募)	<p>先生方にとって森林の環境学習等は難しいと思いますが、私が所属している「やまがた公益の森づくり支援センター」でも、派遣できる人材がたくさんおりますので、そういう方達と協力してできるのではないかと考えています。</p> <p>是非先生から声をかけていただければ、一緒に活動できると思います。一緒に何をやるか、相談しながらできると思いますのでよろしくお願いします。</p>
今村会長	<p>学校現場の立場からすると井上委員どうでしょうか。</p>
井上委員 (小学校)	<p>環境学習についてはどこの学校も実践しており、取組まない学校はないくらいだと思いますが、プログラムを見て、きちんとどういうことを実行するか、計画をたててというのは難しいと思います。環境教育、環境学習するためのものが多いあるんだと、学ばせていただき心強く思いました。</p> <p>環境教育は守備範囲が広く、学校で扱うものも多岐にわたっています。森林、地球温暖化、PM2.5や省エネなど多くの課題がありひとつひとつの線引きも難しいのですが、最終的に全部組み合わせて、私達の暮らし方をどうしらいのかを意欲的に考えられる子ども達を育てるとするのが大事だと思います。</p> <p>「環境」という教科はないので、国語、算数、理科、家庭科などの授業で学習するわけですが、学んだ事を総合的に学習し最終的に総合学習として取り組み、全校生徒の前で披露するというのは、どこの学校でもしているものと思います。</p> <p>データはありませんが、環境教育を頑張っている学年は5年生あたりだと思います。学校の担任は一人なので、専門的なものが身につけていない中で指導しなければいけない厳しさもあります。</p> <p>市教育委員会の紹介もあって、来年度、環境省や県も後押ししている「子どもエコドライブ教室」を開催します。先日、担当の方と話をしたらものすごく熱意を感じました。子ども達にこういうことを学んでほしいというのがありますので、来年度が楽しみです。次代を担う子ども達に地球について知ってもらって、子ども達が、おじいちゃん、お父さん、お母さんの運転をみて、こうしたらいんじゃないのと言えたらすごいことです。専門の方々から最先端のお話を聞けるのは子ども達にとって素晴らしいことだと思いますし、機会や情報を提供していただけるとありがたいと思います。</p>
山本委員 (私学)	<p>小国町は周りが森に囲まれており、場所が場所だからできるというのがありますが、森林学という科目を作っています。ただ、本当に学校の教育現場っていうのはあまりにも忙しく、あまりにも課題が多い状況です。</p> <p>これだけの環境教育のプログラムやメニューがあって、県が本当に大切に政策を展開していただきありがたいと思いました。しかし、学校がそれぞれの状況でメニューを実施すると、全体を見渡して、環境そのものを子ども達が自らの問題として腑に落ちるようになることは難しいと思います。そのことを考えると、学校は、学校だけで環境教育をしようと考えないほうがいいと思います。</p> <p>グリーンツーリズムや、あるいは地域と農業のつながりもとても大事だと思います。当校では春と秋のほぼ一週間、生徒達が許される範囲で一緒に農業のお仕事をしていますが、問題は、どういう農家をお願いするという事です。ものすごくデリケートなところで、どういう農業を体験させたいのかということになります。大</p>

型機械を入れて収益を上げるという形の農家もあるし、手作業、無農薬を徹底して環境と共生するという農家もあります。いろんな農業があり、それぞれの農家の考えがある。環境の基盤である農業にどんな大変なことがあるのか、学校だけではできないことで、地域とのつながりの中で初めて成り立ちます。丸投げするのではなく、そういう出来事をフィードバックして学校の側も教員の側もそれをどう見るか突き詰めることが必要です。

「環境」は命の問題であると思います。これから私達は命をどのようにつむいでいくのか、どういう命の犠牲の上で命を大切にしていけるのか。全体を統一的な、目指すべき視点を持ってデザインしないといけないということを学校は問われています。こなすメニューになると子ども達の中に残らないと思います。大きな課題だと思います。

田中委員
(社会教育)

自分の仕事の面で感じたことをお話しします。私は、社会教育委員となっておりますが、仕事はフリーランスでライターをしています。昨年たまたま仕事で環境関係の取材をしており、その内容について感想を交えてお話しします。

去年、バイオマス発電施設とその木質バイオマスを供給している林業の方にも取材させていただきました。普段の生活で電気は使っていても、発電施設を見る機会はめったになく、お子さんだけでなく、大人も見学すれば、環境への意識を頭の隅に置くひとつのきっかけになるものと思って帰ってきました。

また、自動車リサイクル施設にもうかがいました。ある企業が主催した社会科見学会に同行したのですが、参加者は20数名、多くが高い年代の女性で、男性は4、5名といったツアーで、初めて参加の方がほとんどでした。みなさんの最初のイメージは、車を潰してスクラップ処理するというものだったようです。しかし、全部丁寧に取り外されて車の90%がリサイクルされること、部品やタイヤなど使えるものは同じ敷地内のショップで販売されているのを知り、リサイクルセンターの名前は聞いていたが、どんな施設か分からなかったという声、新品でなくても値段も手ごろだし冬タイヤやワイパーを買ってもいいという声も多かったようです。「環境」という言葉は聞いていても、知らないことは本当に多いものと感じました。

いろいろなプログラム、メニューがあっても知られていないと感じました。プログラムを実施した結果、一般の参加者がしてどういう感想を持ったかを広報することで、参加しなかった人達にも伝えることになります。プログラムがあったことやどういう内容だったかを、広報するといいと思います。

環境という分野は、本当に入り口が広くて大きいので、自分とは関係ないとスルーされがちなので、広報の仕方を工夫するといいと思います。

二藤部委員
(NPO)

私が所属している「特定非営利活動法人環境ネットやまがた」では、今村先生からも御協力いただき、県の社会貢献基金を活用して、今年度、環境教育の事業を実施しています。

E S Dに関わるプログラム作りを中心とした事業なのですが、きっかけとなったのが昨年度の環境省の事業となります。昨年度のものは、東北の各県1つの団体でE S D環境教育プログラムを作るという事業で、山形県では環境ネットやまがたにお声をかけいただき、昨年度1年間実施いたしました。子ども達が体験しながら考えるプログラムということで、結果として9時間のプログラムができあがりました

が、実際にこれを学校現場や地域で使うのは、時間がかかり難しいというのが課題でした。

E S D環境教育プログラムは、本来は、時間をかけて体験して学ぶものだと思いますが、学校現場は大変忙しく、活用していただくためには、1時間、多くても2時間くらいの授業時間でできるプログラムを作る必要があると考え、今年度の事業実施を計画したところです。現在、プログラムの完成に向けた詰め作業をしており、5つのプログラムを作成することとなる見込みです。その一つが先程の紙すきの牛乳パックのリサイクルの環境教育となります。

作るだけで終わっては環境教育にならないので、少し話も折り混ぜる内容です。要望に対してすぐ提供出来るプログラムを用意するという視点で始めたのですが、活用については課題があり、教育センター、教育委員会、学校と連携したいと考えています。

環境教育を実践している団体の方々は、いつでも、どこでも、誰に対しても環境教育を実践したいという気持ちが強いのだと思いますが、実際はどうしていいかわからない、学校現場とどう連携すればいいかわからないと思います。県と協力して、ネットワークやつながりを作っていければと思いました。

有川委員
(公募)

山形市の市民活動支援センターで、NPOや公益活動ボランティア活動の中間支援をしています。個人的には今村先生や白壁先生の指導でネイチャーゲームの実践をしており、山形県シェアリングネイチャー協会でも活動をしています。

昨年より委員になったことをきっかけに3つ実践してみました。14番のスポーツごみ拾い、これは天童の総合運動公園で開催されたものに一般参加者として参加してみました。予想外にとっても楽しかったです。量を集めるだけでなく、分別の仕方を学べて、とてもいい学習だと感じました。

17番の森のホームステイでも苗木をお預かりして今家で育てています。2年後が楽しみで、森にお返ししたいと考えています。

3つ目は33番の少年自然の家における環境教育です。小学校が少年自然の家に宿泊研修をする際に、ネイチャーゲームの会から指導員を派遣し、お子さんたちが自然を体験する3時間程度の活動を提供しています。

私個人の実践はその3つとなりますが、職場で1月28日に山形大学(小白川キャンパス)のグラウンドを借りて鷹匠(たかじょう)を招いたイヌワシの体験会を実践しました。食物連鎖をテーマに、山形大学グラウンドでイヌワシを放鳥してえさを取る様子を親子で観察する内容です。損害保険会社の社会貢献活動の一環でNPO支援センターと共同で行われ、定員50名に対し申し込みが80名を超え、庄内から参加した親子もあり関心の高さにとても驚いたところです。

ただ、いろんな場面でいわれますが、関心がある親子と関心がない親子の差がとても大きい気がします。関心のある方はどんなに遠くても参加しますが、そうじゃない方は全然興味を持たない。親の意識がお子さんに刷り込まれている気がします。親が敏感にアンテナを立てているとお子さんでも体験する機会が多くなるし、親が無関心だと子どもも体験活動から離れる。そんな中で、小中学校などの学校教育で、みんながそういう体験をできる大切さを感じます。

最後ですが、環境教育は私たちの生活の中にあると思います。自分の家の台所やトイレ、お風呂、廊下、隣の家の台所、茶の間などの生活の中で実践することだと

白壁委員 (公募)	<p>思います。とても素晴らしい多彩な取組みがありますが、どうしても、自分に関係ない遠いところで行われているような気がします。どうやって子供たちの腑に落とすか、どうやって広報していくかを含めて、ひとりひとりが生活の中で環境教育、環境問題が考えられるといいと思います。</p> <p>私は、「やまがた公益の森づくり支援センター」でボランティア活動での森林整備や森づくり活動をしている団体の支援の仕事をしています。特に、やまがた緑環境税の助成を受けて活動している団体や企業の方達と森づくり活動を行ったり、子ども達への森林環境学習などのお手伝いをしています。</p> <p>資料には、やまがた緑環境税で106の団体が活動しているとありますが、実際は200ぐらいの団体が森づくり活動や森林をテーマとした環境学習をしているようです。</p> <p>団体が多くなり、活動も活発になっています。人材の高齢化が心配なのですが、定年退職して森づくり活動を始めた若い方がいらっしゃいます。</p> <p>森林をテーマにした環境学習として、人材バンクに登録された方を、団体や学校に派遣していますが、人材が不足しています。平日に行ける方は大体決まっており、60歳以上の方になってしまいます。若い方は働いていて、お子さんが小さいこと等から、平日の派遣は難しい状況です。現在、人材バンクを充実することで、環境学習も充実していきたいと思っています。</p> <p>支援センターの活動として、企業との活動もあります。絆の森として県と協定を結んで活動していただいている企業も増えています。絆の森では、森をきれいにすることをテーマに、環境整備、木を植える等の活動が行われています。</p> <p>CSRとして森づくりをしている企業が多いのですが、環境学習を社外に向けてやっていただくのであれば、支援センターもお手伝いできると思います。企業の森づくりを1歩進めて環境学習もやって欲しいと思います。</p> <p>子ども達に配付している教材についての使い方についてフォローの部分がないとうまくいかないようです。</p> <p>庄内、最上の学校で、教材を利用したところ、先生方から葉の名前等だけではなく、木の生活や、木の使われ方、木は冬はどうなっている、花や実はどうなっているか等を、校庭にある木や身近な公園の木を対象にした学習ができるといいという意見がありました。そのときに御一緒にできたらいいなと思います。</p>
--------------	--

(4) 報告事項

第3次山形県環境計画の中間見直しについて

今村会長	次に報告事項として、「第3次山形県環境計画の中間見直しについて」事務局から説明をお願いします。
事務局	資料4-1及び資料4-2について説明
山本委員 (私学)	<p>第3次山形環境計画中間見直しの新旧対照表から一つ伺いたいと思います。</p> <p>「現行計画」の「現状と課題」にあった「福島第一原子力発電所の事故により放出されたエネルギー政策の見直しが求められており～」という記述が、見直し案で</p>

	はなくなっていることを疑問に思います。
環境企画課	資料は、第3次山形県環境計画の「6 環境教育を通じた環境の人づくり」の項目を抜粋したものとしておりますが、計画を貫く理念として残しております。
山本委員 (私学)	資料2の山形県環境教育行動計画の「①策定の経過」に、「東日本大震災における原子力発電所の事故」が大きな動機であることとして記載されています。環境の問題として切り離せない問題であると思います。山形県としては、この歴史的事情を押さえていかないといけないと思います。
環境企画課	原発事故については、環境計画の「総論」などにしっかり残しており、知事の提唱する「卒原発」についても記載しています。
今村会長	事務局には、委員の皆様からありました御意見、御提言を今後の施策の取組みに活かしていただきたいと思います。 以上で、議事を終了いたします。御協力ありがとうございました。

— 議事終了 —

(5) その他

環境ネットやまがた主催の「やまがた環境教育推進シンポジウム」の開催について案内

(6) 閉 会